



私の教師生活——京都の綴方教師として

小宮山, 繁

(Citation)

私の教師生活 7 ——戦後教育実践に学ぶ—— (2023年度日本教育学会近畿地区研究集会記録) :1-45

(Issue Date)

2024-07-28

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490427>



私の教師生活 7

——戦後教育実践に学ぶ——

日本教育学会近畿地区

——2023 年度——

私の教師生活——京都の綴方教師として

講演者：小宮山 繁 氏

(元京都市小学校教諭。日本作文の会元副委員長、
近畿作文の会元会長、京都綴方の会元会長、京都市つ
づり方の会元事務局長等)

日 時：2023 年 4 月 23 日(日)14:00-16:50

場 所：京都大学教育学部第1講義室・オンライン併用

(川地) それでは、定刻になりましたので、ただ今より、日本教育学会近畿地区、京都大学の E.FORUM との共催による研究集会を開始します。司会を務めさせていただきます神戸大学准教授の川地亜弥子と申します。よろしくお願いいたします。

事前に申し込まれた方だけで 86 人の参加ということで、たくさんの人にお集まりいただけて、とてもうれしく思っております。お礼申し上げます。

本日は、「私の教師生活—京都の綴方教師として—」と題しまして、小宮山繁さんにたっぷりお話しいただきます。よろしくお願いいたします。

最初に、簡単に講師の小宮山繁さんについてご紹介させてください。小宮山さんは京都市の公立小学校で綴方教師として、子どものすてきな作品とご自身の実践を発信し続けてこられました。そして、生活綴方、作文教育の民間教育研究団体での京都綴方の会、京都市つづり方の会、いわゆる京都の綴方サークルですね。そして、近畿作文の会、日本作文の会で活躍してこられました。私は京都のサークルで小宮山さんと出会い、お話を伺うたびに刺激を受けてきました。私から見た小宮山さんは、いわゆる綴方教師といわれる先生たちは本当に個性豊かな先生方なのですが、その先生方の中でも理論派で、例えば生活綴方と到達度評価、ここ京都の地は到達度評価の中心地でもありましたので、そういうことをお尋ねしたりしても非常に明快なお答えを頂き、ここに京都市つづり方の会が、これなのですが、京都市つづり方の会が手作りでというか、出してきた「綴方ノート」の第 3 集というものがあるのですが、ここが一番下に「生活綴方と到達度評価」、藤原義隆というので、藤原さんの論考が載っており、その 1 個上が「高学年の実践報告」、小宮山繁さんなのですね。到達度評価と綴方というのは全然違うみたいなのですが、例えばどのように京都の中で理解されてきたのかということをお尋ねしても明快なお答えを頂き、それから野名・田宮論争について、それから綴方指導における系統性など、議論になったときにも理論的に、そしてご自身の実践を根拠としながら論じてくださる先生です。

そして、先生の実践はとても面白いです。小宮山さんの授業は、実は日本作文の会が 1990 年に駒草出版から出した『作文教育実践講座』の第 17 巻に、VHS というのは若い方は分かりますか。いわゆるカセットテープです。カセットテープで公刊されています。京大にはないかもしれないのですが、私が勤めている神戸大学の人間科学図書館に来ていただいたら VHS で見られます。小学校 3 年生の詩の授業、詩を読み合う授業が丸ごと見られます。子どもたちの表情がとてもいいのです。これはすごく安心して授業に参加して聴いているなというのが、ビデオなのだけれども分かるというのですか、そういうものになっています。関心のある方はぜひ見ていただきたいと思います。

それから今日の資料、オンラインの方はオンラインのフォルダ、ストレージにアップしていますし、会場ご参加の方は紙で配布しています。その資料にもたっぷり子どもの作品が載っていますし、それから今日、小宮山さんから京大に来られた方にはプレゼントということで、「子ども詩集」を配布させていただいています。理論家として、また実践家として、京都、近畿、日本の綴方を支えてきた小宮山さんのお話を、子どものすてきな作品とともにたっぷり 2 時間お伺いしたいと思います。途中で 10 分休憩を挟んでお話しさせていただきます。その後、30 分ほど質疑応答の時間を設けます。最後に、本企画担当のお一人である渡部昭男教授より閉会のあいさつを申し上げます。

それでは、小宮山さん、どうぞよろしくお願いいたします。

「私の教師生活—京都の綴方教師として—」 講演者 小宮山 繁

こんにちは。私は1949年生まれですので、いわゆる団塊の世代です。京都教育大学を卒業した後に教師になりまして、37年間、京都市内の学校7校で教壇に立ちました。その後、小学校1年生の「学びのパートナー」という非常勤講師、常勤講師かな、のお仕事で5年間勤めて、その後、ちょっと重なるのですが滋賀県にある滋賀医療技術専門学校というところで、国語の担当で学生さんを教えました。これもまた楽しかった。一番最後のところで話に出てくる学校なのですけれども、小学生もいろいろ書いて楽しいのだけど学生の人たちが書いてくれるものも大変楽しく有意義で、教師生活を終えることができたと思っています。

私は、先ほども紹介していただいたのですが「京都市つづり方の会」と、「京都綴方の会」で主に勉強させていただきました。今日はこういう、自分の教師生活を振り返るという機会を与えていただいて、大変うれしく思っております。この詩集（『子ども文詩集』）も、何かの形で自分のしたことが残せたらうれしいなと思っていたのがこういう詩集になりまして、大変喜んでおります。

ご存知のとおり、生活綴方というのは長い歴史のある日本独自の教育方法でありまして、子ども観や教育思想などをいっぱい含んだ大変素晴らしい教育実践です。先輩の方たちが創造され、それをわれわれが引き継ぎ、さらに次へつないでいく使命があるのではないかと考えております。今日はZoomの方の参加者の中に、日本作文の会の関連の方と各地域で活躍しておられる方もおられるので、みんなで一緒にやってみましょう、みんなで力を合わせて生活綴方教育運動を進めていきましょうというメッセージを込めて、お話ができたらいいなと思っています。

では、使命感でお前はやったのかと言われそうですが、そうではないです。私が綴方の仕事を続けられたのは、とにかく子どもに作文や詩を書いてもらったり、読み合ったりする仕事が面白かった、楽しかったということが一番だと思っています。

それから二つ目には、子どもと書いたり読み合ったりすることによって、子ども同士がつながり合うのが実感できました。仲間として意識したり、つらいことがあったらそのつらいことを共有して一緒に頑張っていこうということを思ってくれるようになりました。それが実感できたということが大きいのではないかなと思います。

もちろん子どもが書くことによって賢くなっていくということはあるのですが、「ああ、今日はあれを書いたから賢くなった」とか、そんなことは思わないのです。でも、みんなで読み合っているときに、心を寄せていろいろなことをしゃべってくれて、「ああ、子どもがつながっているな」と実感できました。これが二つ目の理由です。

三つ目には、例えば私のやったことをサークルの中で話したりすると、「いや、それはこうとちがうか」ということを言ってもらえたり、「いや、ええ仕事してるね」と言って褒めてもらえました。自分が認められ、一緒に土台で考えてくれる仲間がいたということが大きいと思います。サークルを通じて、教師の中に自分の同志を見つけることができたと思います。それが、京都の中だけではなくて近畿の中にもおられたし、日本全体の中に広がって行って学ぶことができた。この三つが大きく自分が生活綴方にこだわった理由ではないかなと考えております。

この詩集の一番後ろのところに、あとがきがございます。ちょっと見ていただければと思います。このあとがきに、「もしも」という詩があります。

もしも 竹中 郁

もしも この地球の上に
こどもがいなかったら
おとなばかりで
としよりばかりで
おとなはみんなむつつりとなり
としよりはみんな泣き顔となり
地球はすっかり色をうしない
つまらぬ土くれとなるでしょう

こどもははとです。
こどもはアコーディオンです
こどもは金のゆびわです

とびます 歌います 光ります
いきいきとさせて
こどもは
とびます 歌います 光ります

(竹中郁『竹中郁少年詩集 子ども闘牛士』理論社、1984年、pp.8-9)

竹中郁さんは詩人で、戦後、児童詩誌「きりん」を創刊され、編集されました。投稿された作品を雑誌にされるわけですが、その投稿者の中に灰谷健次郎さんがおられました。その灰谷健次郎さんと同じように投稿しておられた、岡本博文さんという方がおられました。その岡本博文さんという方が、京都綴方の会の立ち上げのときには大変大きな役割を果たされました。事務局長をしながら会を運営されました。この岡本博文さんの影響があって、私は児童詩を始めました。『児童詩教育と学級経営』という本があります。その中に出てくる「のぐちてるお」という子どもの取り組みなどは、もう涙なしには読むことができなかった記憶がございます。岡本先生に付いて児童詩をやっといこうというふうに私は思いました。そのとき同時に、仲間の中にもその影響を受けた青笹哲夫という人がいたり、あるいは西条昭男という人がいたりして、その方たちと一緒に勉強することによって、自分がやりたい仕事の方向みたいなものが見えてきたのではないかと思っております。私が教師になった年と、京都市つづり方の会、京都綴方の会が発足した年が同じなのです。そのちょうど京都で生活綴方教育運動が盛り上がっているときに僕が教師になって、サークルに参加したということです。

第1章 子どもはとびます 歌います 光ります

では最初に、資料の2ページを開けてください。「子どもは とびます 歌います 光ります」という題を付けたのが、第1章です。子どもの表現は面白い、楽しい、時にありがたいと思うときがございます。どんな作品を自分がそう思っているかを話します。

せんせいへ

一年 ゆたか

こみやませんせい
あかちゃんがうまれはって
おめでとうございます
ぼくかぜひいてやすんでいたけど
なんだかそんなきがした
だつてがっこうにいつて
せんせいのかおみたら
おとうさんのかお
してはったもん

うれしかったですね。これはこういう紙に、画用紙だったかな、裏に1文字ずつ色を変えて書いてくれました。「せ」は赤とか、「ん」はブルーとかというふうに色を変えて書いて、「せんせい」と言って持ってきてくれたのです。昨日、自分は休んでいて小宮山先生に赤ちゃん生まれたという話は聞いていないのだけど、次の次の日かな、に持ってきてくれたのです。「おおきに」と言ってもらったのですけれども、何か涙が出そうになるほどうれしかったことを覚えています。これはちょうど僕が教師になって5年目です。これを読むと、あのとき息子が生まれたということでいろいろなことを思い出します。

次は、「むかで」という詩です。

むかで

四年 かずゆき

「あ、むかで」
とぼくがいった
むかではきにせずあるいていった
(それはむかでは気にしないですよ。これはそういうふうにこの子は思ったのです。気にしないと)。
ぼくがちょっとさわった
むかでがぐるりとからだをまげはった
(敬語表現なのです。まげはった)。
ぼくがわらった
むかでがあるきだした
ぼくはむかでをつけた

そしたらすにかえった
ぼくは思った
おいしいことをしてしまったなあと思った
なぜかというと
足をかぞえるのを
すっかりわすれたからです

私はこれを読みながら思ったのですけれども、この子はむかだと共生しているなど。私はむかでは嫌ですけれども、この子は共に生きていたと感じたのです。こういう感性を持っているというのが、ああ、これが子どもなのかなという気がしました。このユーモアのあるオチですね。これはわざとではなくて自然に出ているのです。笑わせてやろうとかと思っているわけではなくて、この子が本当に忘れたと思ったということを書いているところが子どもの表現の楽しさであり、値打ちなのかなと思います。

魚になりたいこと 三年 みきや

「ぼくは、魚になりたい」
といた
「だってすいすい泳げるもん」
とお母さんにいったら
「もっと大きなゆめをもちなさい」
とゆわれてしまった
大きなゆめで
いったいなんだろう
お金持ちになることかな
えらい発明することかな
りっぱな人になることかな
ぼくは大人になったら
なにになっているのかな

これはお母さんの気持ちも分かりますね。「魚になりたい」と言われたら、「もうちょっと大きな夢を持ちなさい」と言うでしょうね。でも、大きな夢って何でしょうね。お母さんに言われて、「いや、それはこうや」と子どもも言えないだろうし、お母さんも「大きな夢って何や」と言われたら詰まられると思うのですね。この子の書いていることで面白いのは、「お金持ちになることかな」とか、次に「えらい発明する」と書いている。これは世間的、一般的に言うところごく認められることです。でも、この子はその範疇ではない「りっぱな人」と書いている。お金持ちとか偉い発明ではない何かで立派な人と書いている。この子の考えている立派な人というのは、ひょっとしたら何か私たちが思っているのと違うことかもしれないですね。「ぼくは大人になったらなにになっているのかな」、本当に何になっているか知りたい。この子は散髪屋さんの子どもでしたけれども、今も散髪屋さんを

しているのだろうか、どうなのだろうかと思います。大人にもなかなか答えが出せないようなことを子どもらが考えているということが楽しい。

こんどのりょこうカニカニ 一年 りつき

こんどのれんきゅうの土日に
りょこうに行くのだカニカニ
おんせんもあるのだ
こんどもカニカニ
カニのふるコースだカニカニカニ
カニになってかえってくるぞカニ
たのしみだカニ
カニカニカニカニカニ

まあこれだけ旅行に行くことを楽しんでくれたら親も連れていきがいがありますよね。これはカニカニというのを続けることによって自分の言いたいことが言えるというこのリズム感、詩にしているところがすごいなど。

きょうとう先生 二年 としよし

ぼくはふしぎです
大阪の学校にもきょうとう先生がいます
東京の学校にもきょうとう先生がいます
なんで大阪先生や東京先生は
いいひんのかな
日本のどこの学校でも
みんなきょうとう先生かな
ぼくはそれが一ばんふしぎです

これは何か分かりますか。京都だからきょうとう先生だと思っているのです、この子は。長音とか拗長音とかを習ったら、その分類ができたらかきっと分かるのでしょうかけれども、この子はそう思い込んでいますから、単なる勘違いなのですけれども、学ぶことで失ってしまうような楽しさみたいなものがあるのかなと。子ども世界だけにある何か勘違いの面白さみたいなものがあるかなと思います。

7月26日 一年 たかゆき

せんせいあのね
きょううえもりくんのいえで
しゃぼんだまをしました

おっきいしゃぼんだまと
ちいさいしゃぼんだまをつくりました
とつてもたのしかったよ
しゃぼんだまはすってはだめです
ふうっとふきましょう

これは題がおかしいでしょう、7月26日って。これは夏休みの宿題で書いたのです。本当は「しゃぼんだま」とか何とかという題にしたらいいのにね。でも「7月26日」と書いているところが面白いなと思いました。この子は絶対に吸ったことがありますね。これは書く前に吸ったかもしれん。「しゃぼんだまはすってはだめです。ふうっとふきましょう」と偉そうに言っているけれども、きっと失敗したことがあってこれを書いている。それが透けて見えるようで面白いのですね、大人は。

いもうと

一年 あい

せんせい
いもうとが
あめのどつめたし
おかあさんが
「ゆびつつこみ。」
いわはった
そしたらいもうとが
はなのあなに
ゆびつつこんでん

これは読む僕が、きつとこういう話が好きだろうと思っているのですね。これを書いたら先生にウケるといふか、先生はそういう人だというのが分かっていてこういうのを取材しているのだと思います。これは僕より上手ですね。

ふるたくんのひみつ

一年 えいと

しってた？
ふるたくんって
ゆみちゃんがすきなんやで
まえ、ふるたくんがゆってた
まえはみかちゃんとケーシーちゃんが
すきってゆったはった
でもいまは
ケーシーちゃんがきらいで
みかちゃんはふつうらしいよ

で、ゆみちゃんがすきなんや
きょうれつにこわいこと
やさしいとこが
すきなんやて

男の子って、こういう活発でばんばんぱんぱんと言ってきたりする女の子が好きですよ。これは男の心理を突いていますね。ケーシーちゃんって面白いでしょう。入学式の次の日に教室へ入っていったら、外国人の、アメリカ人の男の人が後ろにいます。「どなたですか」と言ったら、「いや、今日から入れてもらいます。うちの娘が入りますのでよろしく」と言われたのです。ケーシーちゃんという女の子で、僕は何も話を聞いていないから「えーっ？」と言ってしまったのですが、日本へ今ちょうど帰ってきていて、学校に行かないのも何だから、2週間か3週間ちょっとあんだところのクラスに入れてくれないかというので、校長先生が「ええよ」と言われたみたいで、僕のクラスに入ることになったのです。それで、「ああ、そうですか」と言って、その男の人は3日ほど教室に通われましたね。しかも、いつもニコニコ笑いながら後ろにいます。別に私の妨害をしようとされるわけではないから「どうぞ」と言って。そしたら何かえらい気に入ってくださったみたいで、この子は1年半いたのです。そのケーシーちゃんというのは白人の方とのハーフで、お母さんはこの地域の方なのです。べっぴんで、よく金髪のお人形さんがあるでしょう。それに本当にそっくりで、かわいい女の子なのです。みんなケーシーちゃんが好きなのです。ところが、だんだん付き合っているうちに、ケーシーちゃんはなかなかの子で、意地悪だとかいろいろと言い出してケーシーちゃんは人気なくなってくるのですけれども、これはその頃の詩です。

このえいと君も、先生はこういう話が好きだというのが分かっている、これを僕に伝えようとしている。子どもというのは以心伝心、北原白秋が「童心主義」というふうによくいわれるのですけれども、それと同じようなことを感じさせてくれるものがあるなと思っています。子どもの隠し事というのは面白いなと私は思っています、隠さなくてもいいのになと思ったりもするのですが、その中に何か見えてくるものがあると思います。

かんじテスト

三年 まなぶ

はやくかえって かくそ
今日は かんじテスト二十点やったから
家にかえってすぐにかくしました
お母さんが
「かんじテストみせて」
といました。
ぼくは きのうの漢字テストみせてなかったから
きのうのをみせたら
おこりませんでした
そのテストは

こんどは
したじき二まいの間に入れていきます

正直に言うのですね（笑）。これが本当に子どもの素直なところなのだと思います。
次のやつは、ちょっとえーっと思ったのですが、ちょうど2年生から3年生になるときに私が学校を替わるというのでお手紙でくれたものです。

小宮山先生へ

二年 かな

先生はちがうがっこうでまたおしえるから、わたしはいやです。なぜかという、この石田小でいちばんわたしはやさしい先生とおもいました。おわりの会でシェーハーのかみさまをしたり、土ようびはしゅくだいなしで、中かんやすみは、先生とおはなししたりしました。わたしは先生ととったしゃしんと、ともだちととったしゃしんをみて、わたしは、はんなきをしました。

わたしの目は大きいです。おかあさんはわたしのチャームポイントは目だといっています。（何でこんなところに出てくるのでしょうかね、これ。そこへ話が飛ぶのですね。）わたしはたしかになきむしです。いつもおじいちゃんのをいえにいったらおじいちゃんになかれます。でも、もうさんねんせいだからあんまりなきません。

そしてわたしはわるいことをしてしまったんです。それは2つあります。1つはくすのきのきいろいじしゃくをぬすんで、もう1つは大つきさんとゆはらくんと大がきくんと4人であそんでいて、6とうからいしをなげていて、大がきくんがくるまのガラスをわりました。（えらいこっちゃ（笑）。）わたしはもうはんせいしています。

またおへんじください。まっています。

こみやましげる先生へ

かなより

これはどうしようかと思ったのですけれども、話がややこしくなるので私は無視することにしました。言わなければいけないのに、これは私がもういなくなるから言っておかなくてはいけないと思ってくれたのですね。手紙を書きながらこの子はざんげをしているわけですから、いい時間を過ごしたのかなと思ったりしています。この大つきさんとか、ゆはら君とか、大がき君というのは、みんな私のクラスでした。ちょっとこれは困ったなと思うのですが、まあこんなこともあるかと思うことにしました。

高樹のぶ子さんという小説家の方が、こんなエッセイを書いておられます。高樹さんは小学校6年生の頃、毎日日記をつけて担任の先生に読んでもらっていたらしいです。

「日記帳の表題は『乱心』だった」。高樹さんほうそも書いた記憶があると。「こう書けばこんな反応が返ってくるだろう、先生はどんな感想を持つだろうと想像しながら書いた記憶がある。だからこそ、返された日記帳を読む愉しみが大きかったのだし、あるときは思うつぼの一文などに触れてニヤニヤしたこともあったはずだ。あの頃の先生は私の『乱心』の中のうそと実にどの程度気付いていらしたのだろうか。うそが事実以上に人の心を動かすことに私が気付いていたとしたら、先生は私が生まれて初めて出会った読者ということになる」。

赤ペンを書く。またそれを読んでまた書く。その繰り返しのわけですけれども、その中にある先生と子どものやりとりの妙技、その辺がこの綴方の仕事の醍醐味かなと思います。

第2章 地域に根ざす綴方教育①

第2章にいきます。先ほど川地先生が本を紹介してくださいましたが、「地域に根ざす生活綴方教育」という本です。この当時の京都綴方の会、特に府下の方たちは、地域に根ざす生活綴方運動を進めていこうということを強調されました。丹後地域の方は、夏になると民宿が収入の大半なのです。そうすると民宿をやるために、自分が使っている部屋を民宿のために使われるから自分の部屋でなくなるというようなことを子どもが書いていて、なかなか大変だなと。にぎやかになったり、はやったりするのはいいのだけど、子どもの生活はくちやくちやになってくるのだなという話が出ておりました。

丹波の美山町では中村恵子さんがおられて、その先生は、その地域にあるお墓を中学校の生徒さんと回って、その地域からどれくらいの方が戦地に出て亡くなっておられるかという調査をされるなど、その地域の中で課題になるようなことを見つけながら、しっかりした文章を書かせるというようなことをしておられました。この仕事に大変僕らも刺激を受けました。西條昭男さんは西陣の地域で、京都西陣はたのうたの実践をしておられました。自分のおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんが作った織物をとても誇りに思っていることが詩に表現されていました。地域に根ざすというのはこういうことなのだなと思いました。

が、「が」です。私の勤めている学校には西陣はないし、清水焼もないし、三大祭りもないし、別に特に地域を強調するような産業があるわけでもない、伝統的な何かがあるわけでもない。私は何をしたら地域に根ざす実践になるのだろうかというのがさっぱり分かりませんでした。でも、何か地域に根ざすということを自分の中で考えなくてはいけないなと思ってやっていたのが詩集の27ページの「私の育った街」というもので、取材してきて詩に書こうかといってやっていたのです。七条商店街というのが中央市場からずっと続いておまして、ものすごく人気が高かったのです。そこで育った自分というのを詩にしようということで取り組んでおりました。学芸会でも七条商店街の商店街に出て、自分の生い立ちみたいなものを脚本に入れて劇を作って上演したり、これも西條さんが西陣はたのうたでやっていたのをまねたのですけれども、そんなことを結構やりました。「魚屋のおっちゃん」とか、その次の「声が飛ぶ中央市場」とか、こういう詩を書かせて、これが地域に根ざすなのかなと、自分では思っていたのです。でも、もう一つ自分の中ではすっきりしないのです。一つこの資料に載せた「七条通を通る市電」というのをちょっと読みます。山本絵里ちゃんという子の詩です。

七条通を通る市電 六年 えり

ガヤガヤガヤ

「へーらっしやい。」

「安いで、安いで。」

「ほんまにこのプリンセスメロン

おいしいかあー。」

「そら、おいしいでっ。」

こーていなあ。」

ガヤガヤガヤ

七条通りを 通る市電が

交差点で とまっている

買い物をする

楽しそうな声が はねかえる

市電がはいしされた所もある

しかし七条の市電は

ゴートンゴートン

と つかれたように

力をふりしぼって 走る走る

赤、オレンジ、黄

いろいろな色が

パレットの中で 混ぜられた

絵具のような 夕日の中へ

市電も

とけこんで いった

取材させてこういう詩を書かせていたのです。こういうふうを書いてきてくれて、ああ、これが地域に根ざすかなというようなことを思っていました。これは僕が一番最初に赴任した学校なのです。教師になって6年目ぐらいでした。それくらいのときの詩です。

でも、先ほど言ったようなような丹後の実践とか、美山の実践とか、南山城の実践は、ちょっと私のやっているものとは違うのです。僕のは表面つらなのです。そこで生きて、根ざして、働いておられるような、そういうものとは違うなど、自分で思っていたのです。岡本先生という先ほどの児童詩の先生に、「岡本先生、地域に根ざすってどういう実践なのですかね」と聞いたら、「それを言う前に、まずひとり一人に根ざさなあかんよ」と。ひとり一人に根ざすということを詰めていった方がいいのではないかということをおっしゃって、ああ、その方が僕もイメージしやすいなということをおもいました。

第3章 ひとり一人に根ざす綴方教育①

①先生、T君は悲しすぎて書けへんねん

これから第3章の「ひとり一人に根ざす綴方教育」という話をさせていただきます。「お母ちゃん」というT君という子の詩です。

お母ちゃん

三年 Y・T

おかあちゃんは
びょういんで
いまにゆういんしたはる
お父ちゃんは びょういんでのお金を
ださなあかんし
お父ちゃんのお金がへる
おかあちゃん
しんどいんか
ぼくが
四年生になるまでには
かえってくるやろ
はよかえってきて

T 君は私の二つ目の赴任校だった西京極小学校というところで最初に教えた子どもで、3年、4年を担当しました。この子のお母さんは2年生の頃から入院生活をしておられました。お父さんは働きながらお母さんの面倒を見、子どもらの面倒を見ておられました。無菌状態を保たなければいけないから、この子は会いにいけなかったのですね。それで、この子はいとこの家から通う、妹は他の親戚のおうちに預かってもらうというような生活でした。

この子がいとこの家に、いとこというのは何人もいますから、鳥取の方にもいとこがいて、そこに帰ったときの日記です。

いとこの家に行く間

三年 Y・T

お父さんがお母さんのところへおみまいにいています。だからお父さんは ぼくといっしょに行けません。でも、ぼくは鳥取のおばあちゃんのところに行くとき、一人できしやにのっていきます。タクシーも 一人でのれます。バスにのったとき、せいりけんをとって、すわろうとしたとき、すわるせきがありません。しかたなくどこかのぼうを しっかりとぎっていました。

この「どこかのぼうをしっかりとぎっていました」というこれに、この子が一人で一生懸命帰っている姿が目には浮かびます。頑張っているのだなと、つらいことはあるのだけれどもこの子は気張っているなということが分かります。

お母さんがたいいんしたこと

三年 Y・T

ぼくは きょう学童をやすみました。なぜかというとお母さんが びょういんからたいいんしてきたからです。ぼくが学校から帰ってきたら お母さんがいません。

パーマやさんに いていたからです。おかあさんがパーマやさんからかえってきたら

まゆみが草津にいらっているんで むかえにいきました。

これには希望がありますね。よかったねという。お母さんは、9月にもう一度退院されて、すぐに入院されて、12月の30日に他界されました。T君は、冬休みに入ってからすぐ鳥取へ帰っていたので、お母さんの臨終の場に立ち会えませんでした。お父さんに聞きましたけれども、お母さんが亡くなったことを聞いたT君は、「うそ！」と言ひ、1時間泣き続けたそうです。

1月21日の日記にこんなことが書いてありました。

家のこと

三年 Y・T

家には ぼくとおとうさんしかいません。まゆみはお父さんのあねの家にいるので、一日もはやくかえるようにしたいです。ぼくも お父さんも さびしいです。

ぼくが、学童からかえると お父さんが、ごはんのよういをしています。お父さんが めだまやきをつくると お父さんが うらがえしたのでつぶれた。めだまやきをたべるとあまりあじはふつうとかわりません。

ぼくのように 買いものと 大こんおろしと ほとけさんの水をかえることです。

朝七時三〇分に お父さんといっしょに 外へ出ます。

なかなか カギを ぼくに あずけてくれません。

これからはお父さんに ゆわれるように せいりせいとん、とじまりが きちんとできるようになって 一日も早く ぼくに カギをあずけてもらえるように がんばります。

この日記を文集にして読み合いました。「T君さみしいやろな」「T君がんばってる」「T君、お父さん出張しはらへんか。しはったら大変やと思った」「T君えらいな」「T君もえらいけどお父さんもえらい」「うちのお父さんなんかカップヌードルしかようつくらあらへん」などの感想が出ました。

その後、このT君はお母さんが亡くなられたことを書きませんでした。この1年間で一番心に残ったことを書きましようと言って書いたときも、この子は夏休みかな、鳥取にいて海へ行ったことを書きました。僕は横でずっと見ていて、ああ、違うことを書いているわと。違うことというのは、僕はお母さんが亡くなったことをきつと書くと思っていたのです。それで「お母さんのことを書くのかと思ったけど、違うねんな」と聞いたのです。そしたらT君は「難しいねん」と言ったのです。それで僕が「ふーん」と、何か分かったような分からないような返事をしたら、横にH君という子がいたのですが、このH君という子が、「ちがうねん、先生な、H君は悲しすぎてな、つらいねん。それで書けへんねん」。

私は参りました。お母さんが亡くなったということを書いたら、それで何かすつとして一段階前に進むのではないかと勝手に思っていたのです。でもこの子は、その前のものを読んでもそうだけど、前に進んでいるではないですか。一生懸命一人で帰って、一生懸命頑張っている子に、僕はつらいことを思い出させて書かせようとしている。それを横で聞いていた友達が気がついて、「先生、ちがうねん」と言ったのです。

よほど私より偉いと思いました。大体、今だから思うのかもしれないね。その当時は

自分が間違っているとは思わなかったし、書いた方がいいのではないかなを思っていました。でも、これが引っ掛かるのです。私はそのとき謝らなかったな。「つらいことさせたな」と言って謝った方がよかったと。

②私はみんなに言う

いろいろなご家庭があって、それぞれの事情があって、家族のことで心を痛めていることがあるのだということで、これから K さんという女の子の話をします。詩集の 41 ページを開けていただけますか。「私はみんなに言う」というところで、三つ続けてこの子の詩が続きます。「けんか」は夫婦けんかしておられる場面です。それから「お母ちゃんの顔」というお母ちゃんのことを見つめた詩。そして「お母ちゃんと私」。ちょっと読みますね。

お母ちゃんと私

六年 K

「あんな
中路先生も ようち園の先生も
K が『先生』ていうとき
他の子となんかちがうねんで。
なんかこう
甘えてるような感じやねんで
それで
母親の愛情 たりないのちがうかっていわはったわ。
今は、そんなことないけど」

そういわはんのも あたりまえ
お母ちゃんは
K の小さいときから
ずーっとはたらきにいったはった
だから、
お母ちゃんが
家にいはる人が
うらやましかった
お母ちゃん
はよ 定年
きたらええのになあ

こういう詩を書いている、最後に書いたのが「K・T・Y」という詩です。
K という名前の子なのですけれども、「六年 T」と書いてあります。

K・T・Y

六年 T

「なあ、なんで
KからTになって
Yになんの。」
「いわへん。」
「なんでエ。」
「なんでも。」
いつでもごまかしていた
友だちに聞かれたら
ごまかしていた

私が生まれて
幼稚園に行くまで
Kの家に行った
Kのお父さんは酒飲みで
机の中に入っている子どものお金まで
とっていってしまう
Kのお父さんはカヨがきらいで
お母ちゃんに生むなといった
そして
お母ちゃんは
中絶の注射をした
でも
Kは生まれてきた
だから
お母ちゃんに
「生むな言うてんのに
勝手に生みやがって。」
と言った
お母ちゃんは
以前から文句ばかりつけられてきた
もうがまんできなくなったんだろう
りこんした

小学校の時は
二年生ぐらいから
花屋町の方へ行き
今のお父さんとくらしはじめた
一年生の時はおばあちゃんの家でくらしていた

中学生になったら

新しい生活になって
小学校の生活にきりがつくので
Yに変えた
お母ちゃんに
「前のお父さんの顔
覚えてるか。」
と聞かれると
「全然覚えてへん。」
とうそをつく。時々道で見かけたら
わざと遠回りして帰る
あの人に会うと
いやないやな
小さい頃が思い出されてくる

みんなは不思議そうな目で
私に聞くけど
みんなだったら
人に聞かれたら言うか
不思議そうな目で見られるのを
がまんするか
私はがまんできない
私はみんなに言う
それがどういう結果になっても

中学校進学という節目を迎えて、彼女とそのご家族は決断をされて、今現在住んでおられる Y さんという方と再婚して、学校の届けもそのようにきちんと変更されたのですね。これは、K さんにとっては重大事なのです。中学校に行って名前が変わるわけで、そのことをいろいろ何やかんや詮索されて言われるのはかなわないと。じゃあ、私はもうここで宣言するという決意をして、自分のクラスの中でこれを言った。一番の情報源で、「実はあんなんでね、こんなんでね」と言われないようにきっぱりと、本当はこうなのだということを言ったのですね。決意は相当固かったようです。これは自分の生い立ちを詩に書こうと言って、卒業間際に全員で書いたのです。その中で彼女はこれを選んだ。「私はみんなに言う それがどういう結果になっても」。過去と現在の自分を詩にするというのを、彼女は武器にして中学に行こうというふうに決めたということです。

これは、私が教師になって4年目です。これをサークルでみんなで話し合ってもらいました。サークルだけではなくて日本作文の会などでも発表させてもらったところ、この詩を読んだ皆さんの関心は、どうやってこの子はここまで赤裸々に書けたのかということで、小宮山はどんな指導をしたからこうなったのかということを知りました。私は、「いや、卒業前に生い立ちを詩に書こうと言って、この子はこれを選んで書いた」と言いました。

そして、みんなで読み合ったとき、どんな感想が出たのだということも聞かれましたが、

実は卒業前に順番に全員が、一人ひとり読んだのです。だから、この詩を文集にしてみんなで読むということはなかった。だから、みんな黙って聞いていたのです。全員の分を。そしたら、京都綴方の会で話し合ったときに、松永操長さんという研究部長の方がおられたのですが、こうおっしゃいました。「ここに書かれている事実はあまりにも重過ぎる。小学校6年生の子どもに背負わずにはあまりにも荷が勝ち過ぎている。生まれる以前の父親と母親とのやりとりは子どもには悲し過ぎる。『でも/Kは生まれてきた』の『でも』に込められているこの子の想いを、果たして私たち大人は受け止められるのだろうか。私たち大人はこういう詩を子どもたちに書かせてはならない。こういう詩を子どもが書かなくてもいいような世の中をつくっていく義務が私たちにはある」と。

私は、「こういう詩を子どもたちに書かせてはならない」と言われたときに、私が怒られているのだと思いました。でも、いや、そうではない。こういう子どもが出てくる背景と、自分は教師として、大人としてどう向き合うのかという覚悟みたいなものを決めてやらなかったら、綴方の仕事なんかできないぞということを、厳しく指摘しておられたということだと理解しました。この私のいたサークルの先輩は、こういうことを覚悟して臨んでおられるのだなと。自分の生き方みたいなことを問われるのだなということをおもいました。

もう一人、銅銀正美さんという先生がおられました。この銅銀先生はなかなか面白い先生でして、何か決まりかけたこともどんとひっくり返されるといって失礼な言い方ですが、僕らが思っていることと違う発想で本質を突かれるのです。このときも、こう言われたのです。「みんなは小宮山さんが良いクラスをつくっているからこの詩が生まれたと言うけど、僕は違うと思う。この詩のすごいところは、教師を乗り越えて自ら進んでいこうとしている詩だからすごいのだと僕は思う。だってそうやん。『友だちに聞かれたら/ごまかしていた』この子が、『不思議そうな目で見られるのを/がまんするか/私はがまんできない/私はみんなに言う/それがどういう結果になっても』って、自立宣言しているのがこの詩やろ。中学校へ行って名前が変わって小学校時代の友達的好奇の目にさらされるのがつらいから、この詩を書いてみんなに知らせたんやろ。これは小宮山さんを信じて書いたとかどうかという問題以前に、子どもが自分の生きる道筋を決めた詩として読む方が正しいと思う」とおっしゃいました。おお、そうかと。子どもは私の行動範囲の中ではない、もっと違う景色を見ながらこの詩を書いているということだと思いました。

このKさんが、自分の詩日記の表紙に、こう書いていました。

明日

なにがあるかわからない

でも それは

自分で作るもの

ほうっておけば

悪くなるばかり

明日はなにがある

挑んでいるのです。このように書きながら、一生懸命自分で武装しているのだと思います。つらくて悲しいことがいっぱいあっても、書くことによって自分を励まして生きてい

るのだなど。この子が中学卒業のときに私は手紙を書いて、みんなに書いたのですが、ちょうど任命主任制があった頃で、もう学校の中をくちやくちやくにするのかというので腹が立って。府庁で座り込みしました。自分のその時の文集と、「自分は今こんなことをしている。君たちは頑張っているか」みたいな手紙を送ったのです。そしたらこの子は頑張っていると行って返事をくれて、ああ、よかったねといってまたすぐに手紙を送り返しました。

今まで話をしたことは、みんな最初の学校の実践なのです。年を取ったからいい仕事ができるというのは、絶対ないですね。どちらかといったら若いときの方が馬力があっていいなというふうに思います。やはり若い先生がどんどん増えなくてはいけないと私は思っています。

③書かずにいられないことも書く 読み合う

書かずにいられないことを書こう。言わずにいられないことを書こうと。あなたの心の中に言いたくて叫びたくて仕方がないことはありませんか。我慢して、我慢して、心に涙がいつぱいたまっていることはありませんか。心が重たくって一人で耐えられなくなっている・・・そんなことはありませんかという働きかけをしました。

この時分、全国の実践から学ばなくてはいけないと思いました。雑誌「教育」を読みました。丹羽徳子さんという恵那の実践家を知り、『明日に向かって』という実践記録本を読みました。実践のすごさが分かりました。子ども同士が話し合っている日記が出てくるところがあるのです。「誰々ちゃん、あのことは書かなきゃ駄目よ」みたいなことを友達同士で言い合うのです。みんなに言わなければ駄目だみたいなことを、お互い信頼し合っているからなのでしょうけれども、相当僕は無理して子どもがやっているなという気がしました。しんどいだろうな、こんなに詰められたらと思いました。

この当時、日本作文の会の研究大会に恵那や大阪からの参加はありませんでした。日本作文の会が中心になって、組織として、恵那からも人が来る、大阪からも人が来る、みんな一緒になって生活綴方をやっていきましょうよというような働きかけをしようといって、大阪で日作大会をやるよというので動き出していました。東京の方でもそういう動きがあったし、関西の方でもやっていこうということで、近畿の作文の会をつくりました。日作京都大会で、丹羽徳子さんがパネル討議に登壇されました。

そのときに丹羽徳子さんがおっしゃったことが、僕にとっては意外な言葉だったのですが、「子どもには書く自由もあれば、書かない自由もある」と言われたのです。私は、どちらかという丹羽さんたちの仕事は、書く自由はあるけれども、書かない自由はないのではないかと思っていたのです。先生が、あなたはこれを書くことがとても大事なのだということを詰めておられる気がしていたのです。丹羽徳子さんがそんなふうに言われたことが意外で、僕は、「へえー、こんなことをおっしゃるんだ」とショック、ショックではないですね、いいことをおっしゃったなと思いました。丹羽さんが言われることに意味があると思いました。

でも、この時分は、まだ書かずにいられないことを、あなたにとって苦しいこともみんな言えるようにしましょうよということを一生涯懸命言っていた頃です。「私のお父さん」を読みます。

私のお父さんは、十九才の時に、会社で事故にあいました。どういう事故かというと会社の機械がこわれて、その機械に手をはさまって、上からあついあつい湯がかかって、身体全体やけどだらけで、おまけに右手せつだんになりました。私は、お父さんの体のやけどをみていると、あつかったやろうなあとと思います。

私の家に来る友だちは、なぜ一番おくの戸がしめてあるのだろうかと思っていると思います。なぜしめてあるかということ、お父さんはいつも家にいるときは顔も見せて、体も見せて、パンツとはらまきだけにいるからです。お父さんは、人がきしゃはったら、おくのへやへ入っていかはる。私は、そんなしんでもいいと思うけど、はずかしいような気もする。お父さんは、私よりも、くるしんでいると思う。

それから、どこか行くとき、お父さんと歩いていると、まわりの人が、お父さんの顔をじろじろみやはる。私はその時、まわりの人にこういってやりたい。

「そんなん、みんでもいいやろ。自分が、そんな目にあったら、かなんやろ」

先生は、お父さんにあったことがありますね。その時、どう思いましたか。お父さんは、先生にいいましたか。先生はききましたか。

お父さんもなりたくてなったんじゃないから、私はお父さんのことを考えます。みんなはどういうだろう。どう考えるだろう。どううけとめてくれるだろう。

これはMさんという子でしたが、「Mさん、しんどかったことがあんねんな。お父さんはもっとしんどかったやろな。でも、そういうことを気を使ってくれる娘がいて幸せなんやな」というような話をしました。ひとり一人に根ざすには、「本当のことを書く」「書きたいことを書く」「自分の言いにくいことも書ける自由を獲得する」ことだということを、教えてもらったと思います。

佐古田好一さんという先生は初代の京都綴方の会の会長さんなのですが、同授研の事務局長をしておられた方で、その方が「クラスの子どもの中で一番言いにくいことを持っている子が、それを言えること、それをクラスでお互いに支え合えるクラスこそ目指すべきクラス像だ」とおっしゃっていました。この先生は同和教育をずっと進めておられましたから、そういうことも含めてこういう発言をしておられたのです。一番言いにくいことを持っている子がそのことを言えたときに、それは何でも言えるクラスだと。「好き勝手にば一っと言っているのは、言いたいことを言っているのではない」ということをおっしゃいました。大変分かりやすかったです。しんどいことは「しんどい」、つらいことは「つらい」と言える、分かり合える、そういうクラスを目指したいと思っていました。この当時、やはり相当力が入っていたのですね。自分の肩に力を入れながら何か物を言っていたように思います。「お母ちゃんの子どもの時」という詩です。

お母ちゃん

二才の時に 何かの病気で

耳と口 不自由になったん
先生 前に
どっかの小学生の人が
お母ちゃんみたいな人に
石投げたりしたっていった
お母ちゃんも子どもの時
近所の子に石投げられたりされはった
人に石投げられたり
きしょく悪がられたらかなんやろ
横目で 見られたらかなんやろ
お母ちゃんも
ほかのしょうがいしゃの人も
すきで 耳と口不自由になったり
足とか不自由になったんちがう
みんな同じ人間や

この子のお母さんに参観日に来てもらおうと。参観日にお母さんが来られたことがなかったのです。来られたことがないし、来てもらおう。そのときに、みんな自分の名前ぐらいは手話でできるようになろうとって練習しました。それで、ちょうどそういう方には京都市から手話ができる人がついてきてくださるのですね。「私は誰々です」と名前を言って紹介して楽しくしてもらおうではないかと言って、参観日をしました。そしたら来てくださったのです。この子は僕にはうれしそうに見えるように見えました。みんなで認め合うというのは、そういうことなのかなということのを思いました。

—休憩—

④私に気をかけてくれる人がこんなにもいる

(小宮山) 予想されていたと思うのですが、初めから最後まで絶対に終わらない。もうこれだけにしておいたらいいのに、何か付け加えたくなるのですね。こんなこともしたぞみたいなことを入れたくなる。これはもう何かさがですね。すみませんけれども、途中で終わる話ばかりになって申し訳ありません。

今、「私に気をかけてくれる人がこんなにもいる」というところまで来ています。この子は、一言で言うと虐待されていた子です。食べさせてもらえない、洗濯してもらえない、いじめられる。義理の母からです。そういう子どもとどういうふうにしたかということを書いています。この子を裏切らないように他の子に知らせるのにどうしたかの記録です。一生懸命考えた仕事です。また読んでいただければありがたいです。先ほどのしゃべれないお母さん、やけどをされたお父さん、このクラスの中に、この虐待を受けていた女の子が入ってきたわけです。その子らをクラスみんなが励まし合って、この子に「日記（生活勉強と言っていました）を書け。小宮山先生が読んでくれるから」と励まして言ってくれてこの子が書いて、それを状況を見ながらみんなに読んでもらったということがあった

わけです。

⑤二人いっしょに来てもらいたかった

このクラスには、お父さん、お母さんのどちらかがおられなくて、片方のお父さんやお母さんがおられるだけという子どもがたくさんいました。その子らの一人だった T・Y さんの話をします。11 ページを開けていただけますか。詩集の 46 ページにも三つの詩が出ています。その三つとも読んでみます。

キンモクセイの花が咲く頃に、校区に神社がありまして、そこの神社はキンモクセイだらけで、みんなで行ってキンモクセイの中で遊びながらこの詩を書いてみようと思いました。これは割とよくしたのですが、何かに思いを託すような詩を書く。例えば雲に向かって何か言う。「おーい、何とか」と言って呼んで、「今、僕はこんなことをしているぞ」だったり、そういうことを詩の書かせ方としてやっていたのです。これはキンモクセイに思いを託して書いたものです。

キンモクセイ

六年 T・Y

秋になると

学校はいいにおいでつつまれる
あまいにおいでつつまれる
オレンジ色の小さい四まいの花びらの
かわいいかわいいキンモクセイの花で

しかしその命ははかない
雨がふったら
風がふいたら
かわいいキンモクセイの花は
みんなおちてしまう
みんなしんでしまう
そして………たくさんの人にふまれていく
短いキンモクセイの命

キンモクセイを見ていると
時々思うことがある
お母ちゃんもキンモクセイの仲間かなって
お母ちゃんは二十九歳で死なはった
ふつうの半分もこの世にいなかった
だから思う
お母ちゃんキンモクセイの仲間かなって

もしも私の家に

大きな庭があったら
たくさんキンモクセイを植えてみたいな
そう思っている
今はいないお母ちゃんと思って
大事に育てたい

この子のお父さんは、長距離のトラック運転手さんでなかなかおうちに帰ってこれないということもあって、母方のおばあさんがこの子を見ておられました。3人でアパートで暮らしていたのです。この詩は4連で、起承転結になっています。私は構成の指導をしていたと思います。はじめ・なか・おわりにするのか、序破急にするのかみたいなことを教えていました。この「キンモクセイ」は、1連目はキンモクセイの描写から始めると決めていました。

どうやって書かせるかというときに、俳句や川柳では題を与えて書かせる方法と自由に書かせるという方法があって、川柳は必ず下の句から発想させて五七五を作らせています。私は書き方を教えていました。

次の「つわぶき園」、これは自由に書いたものです。

つわぶき園

六年 T・Y

私がまだ三つの時
お母ちゃんが亡くなった年
つわぶき園に入った
お父ちゃんと
近所に住んでいたおばあちゃんと
私と三人で
車に乗ってさがしまわって
やっと見つかったのが
つわぶき園

つわぶきには一年もいなかった
三つまでしかあずかってもらえない所だったから
つわぶきに行ってたころ
今でもよくおぼえてる
行き帰りは
毎日お父ちゃんの手で
給食はカレーやサンドイッチ
おひねるはごはんのあと
まどガラスにはいろいろな絵があって・・・
そんなつわぶきが今は全くちがう
たてものはきれいにたてなおし

遊ぶものはいっぱいふえて
いいなあこんなきれいになって

私の行ってたころは
たてものは古く
遊ぶものは古いすべり台ぐらい
でもそれでもよかった
私にはとつてもよかった
たまにはおこられたこともあったけど
今ではとてもいい思い出
先生に会いたいなあ
友だちに会いたいなあ

3歳の頃の記憶があるというのが、すごいと思います。何度も家でお話をお父さんとして
いるのか、おばあちゃんともするのかよく分からないですけれども、実にリアリティが
あります。保育園の中で温かく育ててもらったのだなということがよく分かります。この
子は、「卒業式」という詩を書いて卒業しました。読みます。

卒業式

六年 T・Y

もう少しで卒業式
卒業式には
お父ちゃんお母ちゃん
二人いっしょに来てもらいたかった
考えても無理な話やけど

お母ちゃんもう八年以上も前に
死んでしまった
仏だんの前にいくと
ふと小さなころのことを思い出す
—ああ、二人でよくおりがみおったなあ
—すぐ泣いてよくおこられたなあ
—ねる前いろんな話してくれたなあ
考え出すといくらでもうかんでくる
思い出していると
急にお母ちゃんにあいたくなる

お母ちゃん
私はこんなに大きくなりましたよ
お母ちゃん

私は元気で今まで生きてきましたよ

小さい頃

電話がかかってきただけでないた
—お母ちゃんどっかいかなあかんのとちがうか
って思ってギャーギャーないた
そのたびにお母ちゃんは
「あとからかけます。すいません。」
ってあやまっていた

小さい頃

しょっちゅう病気にかかっていた
へんとうせんの熱だしたり
ひきつけおこしたり
めいわくばかりかけていた
お母ちゃんがいなくなって
私はすごくかわった
そんな気がする
あんまり泣かなくなった
健康になった
今ではめったにかぜもひかない
学校もあんまり休まなくなった
本当に健康になった
お母ちゃん
今の私見たら
喜んでくれるだろうな
まだまだ直せてないところたくさんあるけど
いつの間にかじょうぶになった
本当にお母ちゃんにあいたいなあ
この姿を一目見てもらいたいなあ

卒業式には

お父ちゃんお母ちゃん
二人いっしょに来てもらいたかった
考えても無理な話やけど
でも私は
—卒業式にはお母ちゃんも来てくれる
って思う
私の心の中で
「T子おめでとう。」

そう言ってくれるんじゃないかな
もしきてくれなくても
私は私なりに
きちんと式をすましたい
「私はもう中学生になります。」
そういっても
笑われないようにしたい

この詩が書かれた頃、儀式としての卒業式を変えようということに取り組んでおりました。それで、この詩をプロローグに使おうと。卒業生入場の前にこの詩を流す。会場で聞いていただくというのにこの詩を使わせていただきました。もう私の趣味でしかないみたいなところがあるのですが、これを使ってみんなが「ああ、今から卒業式だな」という気分が盛り上がったらいいなと思ったのですが、それは私だけです（笑）。私だけが思うという話。

⑤子どもを応援する

小さい子どもの話をします。2年生の子どもで滋賀県から転校してきた子がいました。夏休み後の転入生でした。看護師のお母さんでした。母子家庭で、弟と2人の兄弟でした。お母さんが連絡帳に書いてこられました。「この頃、私の仕事が夜勤午後4時から11時半、だいたい帰ってくるのが午前1時から2時、翌朝午前8時からという仕事なので帰ってきたらすぐ眠ってしまうという感じです」と。理科室におられたのですが、お母さんはうつ伏せで寝ておられました。「誰々君いますか」と僕が入っていったら、本当にしんどい顔をして顔を上げられました。「こんななんなんですわ」と言っておられました。離婚されたところでなかなか大変だろうなと思いました。

それでこの子が、11月に弟が保育園にやっと思行けるようになったので喜んでいすという話で、こんな連絡帳を書いてこられました。「私が送り迎えできない時は、Kに行ってもらうように、又一つ負担をかけようというか、責任を持たそうと思います。早速八日から迎えに行ってもらおうと思うのですが、本当に申し訳ないのですが、保育園までの道順を教えてもらえないでしょうか。Kに」と。これは私に教えろということなのですね。そんなことありかと、私は思ったわけです。いくら何でもそれは駄目だろうと思はして、腹が立ったのです。弟はまだ4歳か5歳で、その子を送り迎えするのだったら、大体「ここをこう行って、道路を渡るねんで」とか、「ここで気を付けて行きや」とか、教えながらちゃんとしなかつたら、そんなもの駄目だろうと思ったのです。ナンデオレガソソナコトマデセンナランネン！と思ったのです。正直な気持ち腹立って仕方がない。それでも連れていったのです。そしたら弟は、Mという名前ですが、「今日は来ていません」と保母さんが言われるのです。余計に腹が立って、それはないだろうと思っして連絡帳を出させて、こう書いたのです。「保育所の決まりをもっとしっかり調べて、どういうふうにK君が行動したらいいのか、具体的に指示してやって下さい。そして彼が自由に遊べる時間も保証してやって下さい」と。これは当たり前のことを僕は書いていると思ったのです。でも、こういうふうに言ったり書いたりして、お母さんに通じるかどうかは別なのです。本当につらい

目をして一生懸命頑張っておられるお母さんに追い打ちをかけるようなことを書いているわけです。これが通じるわけがないと後から気が付いたのですが、腹が立ったものだからそう書いたのです。

放課後この子を残して、この子はちょっと勉強がしんどかったから、「残り。一緒に勉強しよか」と言って、勉強しました。そしたら、この子が弟を保育園まで連れていく話をしてくれたのです。それを聞いて、先ほどの文章に急いで付け加えたのです。「今日放課後、今朝のことを聞きました。朝起きて、ごはんもしっかり食べて、戸締まりもして、弟を連れて保育園へ行ったそうです。私はその話を聞いて、しっかり頑張っているんで、涙が出そうになって抱きしめて頭をなでました。本当に頑張っています」と。そして、「えらいなあ、お前は」と言ったのです。でも、これは何のことを言っているか分からないので、「君な、今、先生に話してくれたこと書いてくれるか」と言って、もっといい紙を渡したらいいのだけど、それこそざら半紙を3枚渡して「これに書いておいで」と言ったのです。そしたら書いてきてくれたのが、「弟のほいくえん」です。

弟のほいくえん

Y・K

きょう ぼくは、弟をほいくえんにつれていきました。

そして弟がいました。

「おにいちゃん おき。」

と弟がいました。ぼくはそのときねていました。そして、ぼくがいました。

「ああ。」

といました。

「もう朝か」

といました。そしておきていました。そして弟がいました。

「ぼくな、グーニーズのな、2めんいって、スーパーマンとった」

といました。そしてぼくがいました。

「それはな、ピーマンやで。だからスーパーマンちがうで。」

といました。そしてぼくがいました。

「はやく、朝ごはんたべよう。」

といました。

「なんやこれ。」

とぼくがいました。

「これは、あんぱんかな。」

とぼくがいました。そして食べていきました。そしてきがえていきました。そしてかぎもしめて、かばんをしょっていきました。そしてエレベーターにのっていきました。

エレベーターをおりて、あるいていくと弟がいました。

「アクマイザースリーみたい。」

といました。ぼくが

「ほいくえんいつてから見たら。」

といました。

「そうしたら、かばんもちち。」
といました。ぼくがいました。
「わかった。」
といました。そしてぼくがもちました。
そして、やっとなつこうにつきました。
「やっとなつた。」
とぼくがいました。弟がいました。
「はよいこう。」
といました。
やまの川までいきました。そして弟がいました。
「かばんもつ。」
といました。そして
「早くいこう。」
といました。弟がいました。
「な、いこう。」
といました。ぼくが
「見えたぞう。早くいこう。」
おうだんほどうをわたっていきました。
「早くわたり。車にひかれるで。」
といました。そしてまっすぐ行って、右にまがりました。そして、ほいくえんにつきました。そしてぼくは、考えました。だから、7時45分に出て、8時30分につきました。
「あれ。」
とぼくはいました。
そしてせんせいができました。
「弟つれてきました。」
とぼくがいました。そしてぼくがいました。
「弟のげたばこはどこですか。」
とぼくがききました。そしてMのせんせいができました。せんせいが、二人でできました。
「Mくんのげたばこは、ここです。」
とおしえてくれました。ぼくは、
「おはしとコップわすれました。」
とぼくがいました。
「おかあさんが、ふとんとうわぐつはもってきます。」
ぼくがいました。
「ぼくも学校にいくから、ぼくいってきます。」
と行っていきました。
はしっていきました。

この後に「むかえにいったこと」というのも書いてきたのですが、作文が書けない、宿

題が書けないといって困っていますとお母さんは書いてこられたのです。それで、この子が遅れているのは作文だけではなかったのですが、それは書けないだろうと僕は思いました。でも、これだけよく書いたと思うのです。何か味があるでしょう。何かこの子の書いているものにね。これは私だけが読むのではもったいないと思ったのです。それで、保育園の人も何かちょっと困っておられるような感じがしたので、保育園の人も何か分かっていただけないかなと思って、文集を作りました。この文集と私の手紙を添えて保育園へ持って行ってもらいました。すぐに返事がかえってきました。

K君の先生へ

先日（24日）作文をK君からもらい、読ませていただきました。保母みんなで読みました。

K君とM君のなかのよさとがんばりがよくわかりました。そして私達も、がんばらなあかな！と思わせる……そんなふうに思います。

M君のおくりむかえも、もうすぐ一ヶ月がたとうとしています。M君も保育園生活に慣れ、嫌がることなくとても喜んで登園してくれますので、ホッとしています。本当に、うれしそうに走り寄っていくM君とニコニコ顔のK君、そんな毎日です。

これから、ますます寒くなって朝も大変だと思いますけどK君には、がんばってほしいです。

最後になりましたが、お手紙と作文ありがとうございました。

とにかくこの子の回りに、この子が育っていく上で仲間になってくれる人をつくれないうまいかと考えました。クラスの子どもらもそうですけれども、保育園の先生も巻き込んで何かというふうに思ったことがうまくいったような気がして、私はとてもうれしかったです。この手紙などを読んで、お母さんが手紙をくださいました。

お母さんからの手紙

仕事が忙しくて午前3時近くに家に帰ってみると「ゆきだるま」（一枚文集名）がテーブルの上に置いてありました。多分、子どもがゆきだるまに書いてもらった事が嬉しかったのでしょう。見て欲しかったのかな。何か誇らしげに置いてありました。手に取って、目を通して見て、二人で頑張っている様子がよく分かりました。

朝、私が深夜でいない時は、ちょっぴり弟の世話は大変みたいです。でも弟も親がいなかったらいなりに兄貴の言うことをよく聞いている様です。

京都へ来て、約4カ月たとうとしています、親から見てもすごく子どもたちが成長してきたように思います。兄貴の方なんか、特にです。以前はメソメソ泣いたりしてどうなるのかなと思っていたのですが、多分まわりの人たちが、とても良い人たちばかりなのだろうなと思っていますし、感謝しています。

作文日記書くことが苦手だったのですが、何とか書けるよう努力しているようです。

この部分が、書いていなかったなので、私が書かせていただきました。

つかれた身体にムチ打って帰ってみると、
テーブルの上に 息子のほこらしげな
顔が浮かぶよな プリント二枚
我が子とも思えぬ位
ほほえましい親のいない登園風景
かわいそうやな 大変やろうなと思いつつ
心を鬼にして
いつか よい思い出となる日を願いつつ
人の心に 感謝し、涙流す 私かな

お母さんの気持ちが大変よく分かりました。いいかげんなお母さんではない。私は初め、いいかげんなお母さんだと思っていましたが、でもそんなお母さんではなかった。大変よかったですと思っています。

なかなか作文が書けないというのが、先ほどのプリントを3枚渡してから、めきめき書くようになったのです。次の「サンタクロースがきたこと」というのは、なかなかいい日記だなと思います。

サンタクロースがきたこと Y・K

二十四日の夜、お母さんが、おしごとでいませんでした。ぼくたちは二人でした。Mと僕でいっぱいくつ下を家の木にかけました。

Mが言いました。

「サンタクロースがくるかなあ。」

といいました。ぼくが

「くるかなあ。」

と、いいました。

(本当にくるかなあ。だけど、お母さんにはうそついて、おこられるし、こないのところがうかなあ。くるくる、やっぱ、ちゃんとくる)とおもいながらねました。

よく日、おきてくつ下の中を見たら、はいっていませんでした。お母さんがいいました。

「あんたが、うそつくしこなかったんとちがうか。」

「ああ」

と、ぼくがいいました。

そして26日の朝、Mがおきて

「お兄ちゃん、おきて。」

と、大きな声で何回もいいました。おきてみると、マクラのところに大きなはこが二こありました。ぼくは、サンタクロースがきたのでうれしく思いました。Mとさっそくあげました。ぼくがほしかったロボットのオモチャでした。そして、うれしくてMとさわぎました。

お母さんがおきてきて

「サンタさんきてくれてよかったなあ」

といました。Mが

「サンタさん、お母さんと、ちがうかなあ」

と、いました。お母さんが

「サンタさんは、いるとしんじている人の心の中に、いつでもいるんちがうか。KとMはしんじてたから、サンタさんがプレゼントもってきはったんと思う」

といました。

ぼくは、やっぱり、大きくなってもサンタさんはいるとしんじます。

いいなと思うのですよ。

暉峻淑子（てるおかいつこ）さんという方がおられます。岩波新書で『ほんとうの豊かさとは』という本を出されて、その後に『サンタクロースってほんとうにいるの?』という絵本を作られました。本当にいい絵本です。子どもがお風呂に入っているときに、一生懸命「サンタクロースって本当はいないのちがう?」とか、「お父さんやろう」とかと言いかう。うまく子どもの関心をひくような答えをしながら、そうだとともそうでないとも言わないような展開にしてある。僕のところの子どもは、小学校の先生に「サンタクロースは親だ」と言われたのです。やめてほしいなと思いました。そんなことを言ったらあかんやろうと私は思うのです。「サンタクロースがきたこと」を読むと、お母さんが一生懸命子どもに合わせながら話をしておられて、いいお母さんだなと思いました。

この後、このままではお母さんも子どもも疲れ切って駄目だろう。いつまで続くのかと思っていたのですが、親しいお医者さんが少し遠方で開業されるということで転校していきます。「先生、どう思われますか」とおっしゃったので、「それはいいと思いますよ。お母さんの働き方が変わって、夜、一緒にいられるだけでも十分違いますか」と言って、転校していきました。後で文集を送ったりして、その後、あまり泣いていないので安心してくれと本人が書いてきて、お母さんも手紙を下さきり、よかったなと思いました。

「ゆうやけ」という詩があります。これはのり子さんという近くに住んでいた子が、この兄弟、K君のことを書いたものです。読みます。

ゆうやけ

二年 のり子

きょう ゆうがた四じはんぐらいから、二とうのよこで、きれいなゆうやけが出ていました。そのとき、いもうとときていました。

いもうとに

「きれいやなあ。」

といました。いもうとも

「きれいやなあ。」

といました。

そして、ずっとあるいていくと、Y・K君がいました。

「Yくーん。」

といました。Yくんが

「ハイ。」

とゆわはりました。わたしが、こういいました。

「ひとりできたんか。」

とききました。Yくんが

「うん。」

とゆわはりました。

「なにしにきたんや。」

とわたしがとききました。

「ゆうやけ、見にきたん。」

とゆわはりました。

Yくんが

「あのまるっこいキラキラのやつ。」

とゆわはったし、わらっていました。

この子の妹とこの子と、それからY君と3人で、団地に3人が立って夕焼けを見ている。何か希望がある感じがしていいなと思いました。

この頃の日本作文の会の活動方針に、こんなことが書いてありました。

「指導が子どもに通じなくなり、子どもの前に立つ喜びを失いかけている教師は少なくない。子どもをめぐる状況がともすれば否定的にしか見えないなかにあっても、それでもなお、子どもたちは、生き方をともに考えてくれる教師、ともに歩んでくれる教師であることを切望している。不安やつらさを抱き、苦悩しながら生きている子どもたちへの限りない共感を根底にすえ、ともに、この時代を生き抜くもの同士の連帯を作り上げることに、教師としての生きがいと喜びを回復していきたい。そして、その際、子どもの背後に存在している父母のくらしにも生活者としての共感と連帯をつくることが重要である」。

この言葉は、私は今も生きています。今、保護者との関係はますます難しくなっていますが、やはり共感が大切です。共感関係をつくっていくことがなかったら、何をするのも難しいだろうと思います。

僕が石田小学校にいたときに、ちょうど日の丸・君が代の強制というものがありました。それに対して、卒業式をつくっていく、創造していくことが大切だと考えていました。そのときのキーワードにしていたのが、一つは斎藤喜博さんの「卒業式は最後の授業だ」という言葉でした。私は学生の頃、斎藤喜博にあこがれていまして、授業で勝負するということにあこがれていまして、「開く」という雑誌を読んでいまして。その斎藤喜博さんが卒業式は「最後の授業だ」とおっしゃっていて、この最後の授業だという見方はとてもいいと思っていまして。6年を持ったときに、実践を修学旅行、運動会、学芸会、卒業式と、ずっと絵巻物のように展開していく。筋の通ったものにしていくというような思いもあって、卒業式もその一環だという思いでやっていました。この当時はアイ、アイというのは己、自己確立の「I」、それから目、しっかり見つめる「EYE」。それから「愛」ですね。そういう三つのテーマをかかげて仕事をしていまして。

子どもが主人公だということもキーワードで、子どもが主人公の最後の授業というイメージでした。演壇をフロアに下ろしました。演壇をフロアに下ろして、舞台にひな壇を作って、そのひな壇のところに子どもたちが座る。主人公は子どもだと、見える形にしまし

た。日の丸の旗ではない。校長先生が主賓ではない。校長先生には下に下りてもらう。子どもを主人公にしていこうというふうにしました。大きくフロアが空きますので、そこに花を置いて花道を作る。それから卒業証書は、ちょうどまたそのときに手作りの和紙ができる先生が転任してこられたのです。そういう技を持った人が。その人に和紙のすき方を教えてもらって、コウゾやミツマタなどが手に入らないというので京都の黒谷という所に行き行って手に入れて、それでフタバアオイという植物を育てなければいけないのですが、それも育てました。それに校長先生が賛同して下さって、版木を作ってください、それを1枚1枚刷って、世界に1枚しかない卒業証書を作ろうと行って実行しました。

卒業証書授与のときには、名前を呼ばれたら返事をして、演壇の上にあるマイクの前で、これから私はこういうふうに生きていきたいというようなことを話す。そして横にはスライドがあって、赤ちゃんのときの写真が写る。一番下のところには父母の願い、こうなってほしいとか、あんたはこうだったということを書いてもらうというので過去と現在と未来が一体化する空間をつくろうという卒業式をしました。これを何年か続けることができました。

そういうことをしていたので、その中に日の丸・君が代がどう入るのですかと問いました。創造的なことをやることで、日の丸・君が代体制と対峙していこうということを考えました。これはすごく志は高かったわけです。そういう案を職員会議でもどんどん提案していきました。

校長先生はそういうことがよく分かる人でした。われわれに「先生方が自由にやってください。先生方が一番得意なことをそれぞれに出し合ってやりましょう」とおっしゃいました。その先生のそんな言葉を信じてやっていたのです。ところが、京都市教育委員会の指導の名の下でめちゃくちゃな強制で、この校長先生もどうしようもないところに追い込まれました。毎日10時になったら電話がかかってくると言っておられました。「ちゃんとできるようになったのだろうか」「決まったのだろうか」と言って責められたそうです。ひどいやり方でしたね。指導と言う名の強制ですね。本当にひどかったです。

それで、私たちは私たちでやろうと行って、ビラまきをしました。それから教育懇談会を開いて「今、学校でこういうことが起こっている」という話をして、非民主的だ。創意工夫を壊していくものだから何とかしてほしいと、校長さんとも話し合ったりしていたのです。そして、親が立ち上がってくださったのです。署名を集めると、4日で465名の署名が集まりました。一学年2学級、全校生徒数400いくかいかないかの規模の学校です。そこでこれだけ集めてくださったのです。それで校長、市教委に抗議電話をしてくださって、僕らも校長先生と話し合いました。「先生、話し合いで解決しましょう」と言ったのですが、日の丸君が代が卒業式に入りました。

卒業式の前日に、特別支援学級の先生、それから担任2人、この3人と卒業生の保護者で話し合いました。私たち3人が起立するのかどうか、それを心配して下さっていて、不起立だったら先生がひょっとしたら解雇されるのではないかと。それでは駄目だから、「もし先生が座るとおっしゃるのだったら、私たちは先生の周りを取り囲んで先生が何をしているのか分からないようにします」と、そこまで覚悟を決めて言い切って下さいました。付け加えて、「先生、子どもたちは素晴らしいですよ」と。そのときは何のことを言われているのか分かりませんでした。

当日どうなったかといいますと、「君が代」はやはり鳴りました。教頭先生がラジカセを持ってきて、スイッチを入れて「君が代」が鳴り始めたのです。そしたら、うちのクラスのF君という子ですけれども、「僕たちはそんな歌、歌いたくありません。そんな歌、歌うぐらいなら、小宮山先生に習った『たんぼぼ』を歌います」と言って、「1、2、3」という掛け声が起って、「雪の下の・・・」と歌い始めたのです。彼らは歌い切りました。それで着席しました。5年生も座りました。在校生も。保護者も座って、保護者は拍手をします。私は座っていたのですけれども、その「たんぼぼ」を聞きながら涙が出ました。足が震えました。そういう卒業式でした。

私が式が終わった後に教室に戻ったら、保護者がだ一っとなってこられてみんなで拍手してくださって、その後、「先生、初めから最後までずっと青春ドラマでしたね」と言われたのです。「昨日の晩、子どもたちの計画を聞いて、子どもを抱きしめてやりました」「親どうし電話をかけ合って『よかったね』と言って泣いたんですよ」と。

これは、こんなふうに子どもを追い詰めることを私はしたのだなと思って、こんなことが全部よかったと思いませんけれども、私はこの子らに「君らな、ええ子らなんやけどな、自主性がない」と言っていました。でも、この子らはすごい自主性というか、無謀というかを持っていたのだなと思って、私はこの卒業式でたくさんを学びました。教育の中身を創造することはまさしく戦いであり、父母と手をつなぐことでしか達成できないことだということです。

このことを契機に、「たんぼぼの会」という教育懇談会が恒常的に活動することになりました。私の勤務したこの学校は、先ほど言ったように公団住宅や市営住宅、マンションなどの集合住宅ばかりの、ふるさとというのとは縁遠いところにある学校です。でも、そこで育っている子に、何かしようではないかということで夏祭りをしたり、私の後に入ってきた校長先生が、「小宮山先生、校舎の周りずっとローラースケート場にしませんか」と言われたのです。そしたら休みの日にでも子どもが遊びにくる。「それは面白いですね。先生、本当に実現できるかな」と言ったら、「やれるかもしれない」と。そういう案も含めて、学校の中で性教育をどうするかとか、まずはいろいろと話してみる。この後、僕はこの学校を出ていくのですが、出ていった後も教育懇談会は続きましたし、和紙の証書も続きました。よかったなど。今はどうですかね。分かりませんが。

松永先生は、こんな詩を書かせてはいけない、大人にはそれだけの責任があるとおっしゃった。そういう世の中にしていくために何を私らはしなくてはいけないのかということ、これで教えられたのです。

⑥隠さなければならぬものは作らない

上京区の、京都市のど真ん中の学校に転勤になりました。たまたま教壇を動かしたら、戦前・戦中の児童の作った新聞の切り抜き作品、校内・校外児童心得、日の丸の小旗、教科書、出征する父兄の写真などが出てきました。「えらいもんが出てきたな。何でこんなもんが入ってるんやろ」と言っていました。そしたら、その中の写真を見たある子どもが、「これ、うちのおじいちゃんや」と言い出しました。「うちのおじいちゃんの写真がここにある」と言って家に持って帰って聞いたら、その写真が何に使われたかが分かったのです。出征兵士を家族に持つ子らは、奉安殿の前で校長先生と特別に記念写真を撮るのです。戦

意高揚のために、恐らくそれが授業でも使われたのだろうということが分かりました。では、何でそれが教壇の下に入っていたのか。その辺のことを、「ああ、それだったらきっとこうだ」と校区の方が言ってこられました。それを京都新聞が記事にしてくれたのが以下のものです。

京都市上京区 A 小学校で先日、ちょっと変わった日曜参観があった。同校で昨夏、戦時中の出征兵士の写真が見つかったことがきっかけで、戦時中に在学した同校卒業生の話を見守る者が聞くことになった。

登壇した五十代の男性二人は「当時の生活はすべてが軍隊調で厳しかった」と振り返った。

その頃の授業では先生が日本とアメリカの戦闘機の絵を交互に見せ、児童に即座に答えさせるのだが、間違えると「敵と味方を間違えてどうするか」と低学年でも容赦なく殴られたという。

男性の一人は「学校が本当に怖かった。下校の時、校門を出るとホッとした」と話した。

ところが、ラジオから聞き慣れないことばが流れた日を境に学校が変わった。怖ろしかった先生が優しくなった。それどころか先生たちは、今まで大切にしていた物を焼き捨てたり、教壇の下に隠し始めた。

当時一年生だった男性が訳が分からないまま何かが変わったことを悟った。「その日」が終戦と知るのはずっと後のことだ。男性は、見つかった兵士の写真もどうやらその時に隠されたのだろう、と推測する。

今から当時を振り返ると、終戦で何もかもが、変わったように見える。でも校舎は以前のままだったし、先生、児童の顔ぶれも同じだった。終戦で優しくなった先生は、人格が変わったわけでもない。

終戦時の出来事に限らず、世の中とは何らかの考えに左右されてがらりと変わってしまう危うい存在なのかもしれない。終戦の場合は、軍国主義という考えが息をひそめて世の中は良い方向に変わった。だが、当然、逆もあり得る。

話のあと児童の一人は「おじいさんの子どもの頃に比べて、私たちはしあわせ」と感想を述べた。子どもたちが幸せと思う世の中がいつまでも続いてほしい—赤茶けた兵士の写真が掲示された講堂で、参加者はそんな願いを思い浮かべた。

(出典：京都新聞 1993 年 3 月 2 日夕刊「プラスα 平和な世の中 変わらずに…」
社会面、9 頁。※学校名は匿名に変更した。※京都新聞より転載許可を得た。)

私たちは、都合が悪くなったら燃やさなくてはならないものを、二度と作ってはならないのだと思います。「放課後が終わったら運動場でいっぱい物を燃やしてはった」と。GHQ が入ってくるということで、先生たちは慌てて燃やしたのです。その一部を、これは想像ですが、全部燃やすのは忍びなかった人が一部教壇に隠したのだと思います。全部否定されたのです。全部否定されるのが嫌だったから残されたのではないかなと思いました。

この話してくださった方は面白い方で、烏丸の四条に GHQ の事務所ができ、そこに占領軍が入ってきたときに、この人は見にいってさうです。他の人はみんな、自分の家の中

に隠れて見ないようにしていたのです。何をされるか分からないとこわがって。でも、この人は行ったのです。なぜかといったら、キリスト教だったから。戦前キリスト教の信者だからといって、「お前は天皇とキリストとどっちを信じるのだ」と問い詰められたそうです。GHQ が来たときは、あの人たちはキリスト教の人だからと思って行ったそうです。烏丸通をだーっとジープが上がってきて、ものすごい威圧感を感じたと言っていました。

そんなことがあって、この資料をどうするか考えました。これは残しておこうといって残すことにしました。でも、この学校は廃校になってしまったのです。この後、この資料は学校に残した方がいいのか、資料博物館みたいなものがあるからそこに渡すのか、それはもう校長先生にお任せすることにしました。多分、きっとこんなことに使われたのだろうという説明のラベルを作ったのだけど、でもその後どうなったのか分かりません。残っているのかな、残っていないのかな、分かりません。

第4章 ひとり一人に根ざす綴方教育②

①荒れる子どもたちと発達課題のある子

発達障害を持った子がクラスにいるとき、なかなか思いどおりにならなくて、悩みました。このことを伝えさせてもらおうかと思えます。何か私が担任したらうまくいったという話ばかりしていて正直ではないからします。子どもが反社会的な行動をするという言い方ではなくて、子どもが荒れているという言い方をしました。職員室で隣にいた、3年生の先生が「誰かが階段から突き落としてくれたら私は休めるんだけど」と言われました。

「手だったら学校に来なくてはいけないけれども、足だったら骨が折れたりしたら学校に来なくて済む」と。深刻な悩みです。なかなか子どもが落ち着かないというので2月に校長や教頭が教室に入り、次の担任は小宮山に決まったということで、4月から私が担任になりました。

彼らの良いところは、とにかく物おじしない。パワーがある。元気で休まない。この子らは不登校とは全く関係ないです。楽しいことをしたいと思っているのです。担任と仲良くしたいと思っているのです。そして、できればけんかなんかしたくないとは思っているのです。

一番困ったのは、授業をさせてくれないのです。こんなことは初めてでした。こそこそ話す私語ではないのです。教室の端から端まで届くような大きな声で全然関係ない話をするのです。どこからそういう話になるのか、誰かが「俺、巨人好き」と言い出します。すると「俺は阪神が好き、何たらかんたら」「巨人が」と、授業をさせてくれないのです。それからカードゲーム。はやっているカードゲームについて、彼らはすぐ話しだして盛り上がるのです。次に、立ち歩き出します。「どこへ行くのや、君」と言ったらわけのわからぬ返事をします。笑いが起こります。最後に出ていこうとします。参りました。ノートには猛々しい人間の顔を描いています。私には気色の悪い絵がいっぱい描いてありました。

「お話したことをノートに書きましょか」と言ったって書かないし、もう本当にどうしようかと思いました。加えて、教科の好き嫌いがものすごく激しい。僕が国語を一生懸命やろうかと思ったら、「国語大嫌い」と言い出すのです。「そんなこと言わんとやろうや」と言うのですが、「いや、俺、大嫌い」と言う。

その中でも目立っていた4人のことを話します。H君は忘れ物が常習化していて、学校

からの配布物は絶対に持って帰りませんでした。

それから K 君という子は、身の回りの整理整頓ができなくて、いつから入っているか分からないようなプリント類とか給食袋とかが、机からわんさか出てくるのです。初めは「一緒に整理しようか」と言ってやるのですが、そんなことをするのが邪魔くさいのです。「先生やって」と。だから、途中から私が整理することにしました。その方が落ち着くのです。

それから M 君という子はなかなかで、机の上に足を載せていました。テストでは大声を出しながらふざけた答えを書きます。音楽の聴き取りテストで「一番やさしく温かい感じで歌っているのは何番でしょう」という設問があって、わざとらしいやさしさなので答えはすぐに分かるので、そっちだと書いたらいいのですが、「そんな人によってちがう」と書くのです。本当にそうですよね。きっとそれが正解なのですからけれども。地域のお年寄りに手紙を書こうという取組がはやった時のことです。この学校は道徳の研究をしていました。その中でこういう手紙をよく書かないといけなかったのです。すると、この子は「お前なんか誰か分からないからそんな書けない」と書きました。正直ですね。でも正直だと困るのです。給食の時間、おかずの容器にマーガリンや牛乳を入れます。そして「気持ちの悪いもの見たい人」とか言うのです。そしたらまた「はい」とかと言う子がいるのです。そしたら、これを飲むのです。「もうやめとき」と、私も胸くそ悪くなるから「やめときいな」と言うのですが、不満そうににらんでいました。問題行動もあって、この子は校区にあるスーパーに行って、カードゲームを盗んだりするのです。それで「ちょっとした、これは先生の胸に置いとくわけにいかへんから、お母さんに連絡します」と言うのと泣きわめくのですよ。「もう俺は殺される」と言うのです。

それからもう一人 O 君という子がいました。社会の勉強しようとする、「先生、体育のラケットベースボールしようや」と言い出す。「いや、今はすることできひんやん。また放課後しよか」と言っても待ってくれませんが、ずうっと言い続けました。一人が作文を読んで感想を言っていると、全然どっちでもいいようなことを質問し倒すのです。質問し倒してどう言うかといったら、「ああ、これで授業時間が少なくなった。ああ、よかった」と言うのです。本当にどうしてやろうかと思うぐらい腹が立ちました。こういうのが常態化していました。女の子はすごくよく勉強もできるし、態度が悪いのは男の子で、特にこの4人が荒れていました。

それで、前年度からそういう状態だったから、参観日にお母さんが覚悟して来ておられて、「何か問題があったらいつでも集まります」と、えらく協力的に言ってくださるのです。それで、「まあまあ、最初の参観日のときにどうするか、ちょっと見てもらえますか。それを見た状態で考えましょうか」と言って、参観をしました。

1 時間の算数の授業を何なくするぐらいのことは私にもできたので、やったのです。そしたら、「あの子たちはちゃんと授業を受けられるのですね」と言って、えらく感動して下さいました。でも、その後ずっとそれが続くとは思えませんが、「もうちょっと様子を見ましょうか」と言いました。学ぶ意欲、学ぶ意味、それから学び続ける意思、多少の困難があっても頑張れる気持ち、この子らはそういうこととは無縁です。どうしたらいいか、本当によく分からないままでした。

クラスは 21 人だったのです。これだけ少ない人数でこんなことになるのだと思いました。定員を 40 人から減らすと言っていただけれども、20 人でもこんなことが起こるのだと

いので私もショックでしたが、1年ごとのクラス替えがない環境でした。クラス替えはなしで担任だけ1年ごとに替わるという体制でした。この学校は京都市の北部で、地域的には大変落ち着いているのです。近くを加茂川が流れていて府立植物園があって、いいところです。わざわざ出掛けていくぐらい環境のいいところです。

勉強は、よくできる子が多くいました。京都市全体のテストがあったのですが、テストの結果ははるかに平均点を超えるクラスでした。ところが、私のクラスは「準・要保護家庭」「転入児童」「母子家庭」がいずれも約半数近くありました。ある意味では古典的な子どもの生活の不安があり、親が不安定でした。でも熱心なお母さんたちで、迷っておられるのだなと思っていました。その子たちの作品を紹介します。H君の「わたるせけんはおにだらけ」です。

わたるせけんはおにだらけ

ぼくの家の人はいんおにみたいにこわい
兄だったら、かたいボールを投げてケガをする
妹だったらがめんをけってくる
父はすごくおこつたらなぐってくる
そしてもっともこわいのは母だ
母はバットかカサでしばくし
外においだされる
もうこんなのいや～～～

「あ～あ、もう嫌、こんな生活」が口ぐせです。本当にそう思っているのかどうか、面白がって言っているのか分かりませんが、こんな詩を書きました。それからもう一人がO君です。

ムリやり行かすな！

火土日天国
水木金月地ごく
とくに月水金は大じごく
2年のときある所に行くことをかかってにきめられた時
「ふざけんな一めんどい
いやじゃそんなもんいくかー」
母に言ったった
けどむりやり〇〇学園（京都の有名な私塾の名前）につれてかれた
今四年自殺しそうになった時は何回もある
じゅくの点数がどうした
学校での事も考えろや
一回たい学相談した

もちろんたい学しようとした
けど校長と母のおどしでつづけている
けど今はふつう
じゅくにいくのはいいけど
宿題がうざい
宿題なんかつくったやつ
地ごくにつれて行ってやる

この子はお医者さんの子でした。母や父の期待に応えられるほどの成績が出なかったのです。それで塾に行かされて、先ほど朝の時間につまらない質問をいっぱいしておいて、授業が延びたら喜んでいっているのはこの子でした。学習に対する嫌悪感が出た詩です。受験戦争の戦士である彼のもがきのようなものが出ています。

この受験勉強に追われて「うざい」と言っている子と、先ほどの「おにだらけ」と言う子、この子らが時に仲良しなのです。一緒によく遊ぶこともあるのです。TVゲームをして遊ぶのです。ゲームを持っているのはお金持ちの方の子で、一方の子は貸してもらうのです。貸してもらうけれどもなかなか返さないで、トラブルが起こります。それでけんかをするのです。また大きな声で。給食の時間に、びっくりしました。この受験する子が、「黙れ、貧乏人！」と大きな声で言ったのです。私はええっ？ と思いました。「黙れ、貧乏人」、そんな子どものなじり合いを聞いたのは初めてでした。このケンカの発端はH君が、「ちょっとお金があるからと思って偉そうにして」と挑発したことだとO君は言いました。それを怒ったのです。お金がないとかあるとかいうことの悲しさとかつらさを受け止めて生きていくことは当然あるだろうと思っていたけれども、こんななじり合いをするなどというのは信じさせませんでした。

それで、何ができるだろうと思って、「ぼくの生まれた日」の授業をすることにしました。これは道德の教材です。「ドラえもん」ののび太が生まれたときを過去にさかのぼって調べるといって、お父さんとお母さんがどれだけ心配したかという場面が出てくるのです。これで何かできないか。これに取り組みながら、お父さんやお母さんがどんな思いで子どもが生まれたときにいたのかということ、自分は何か愛されていないと思っている子に言ってもらおうというのを授業で取り組みました。この教材を使いながら、メインは、お父さんやお母さんに自分が生まれたときのことを書いてきてもらう。手紙をもらう。その手紙を読むという、授業をしました。

私は授業案にこう書いています。「親が注いでくれる愛情をありがたいと感じていると思う。しかし、恩着せがましいことを言われることを子どもたちは望まない。又、そういうことを親から強要されると反発したくなる年齢になってきている。ここは学校の出番だと考える」。学校が教材としてこういうことをやることに意味があると思って、21名分、書いてもらえないか聞いて、書いてもらいました。

ご家庭から届いたものは、いずれも大変感動的なものでした。どれだけ病気になったかとか、先ほど言った、お母さんに連絡すると言ったら激高して泣き叫んだ子どものお母さんは、身体が弱かったので、K君がおなかにいる間に何度も病気になって3回入院したこと、生まれても羊水を飲んで泣かなかったこと。そして、お父さんもお姉ちゃんもお医者

さんも、みんなで「男前や」と言い合ったことを知らせてくれました。

僕は、お父さんやお母さんに手紙を書いてもらってそれを読むというのを、先ほど川地先生が紹介して下さったビデオの中でもやっています。お父さんやお母さんがどんな思いをしておられるか。子どもが書いたものをお父さんがどう読まれるのかということ伝えていきたいという思いで、時々していたのです。このときは全員で。

そしたらこの子は、「そんなもん、知らんのに書けるか」というようなことではなくて、「お母さん、いつもめいわくかけてすまないね。ぼくは三回死にかけてるから生きててよかった。これからもよろしくおねがいします」と書いたのです。これは、半分照れくさくてこう書いていると思います。でも同時に、絵も描いたのです。それはお母さんとお膳を囲んでいる絵でした。お父さんはどうも出ていかれたみたいで、この子とお母さんと二人で暮らしていこうという意味なのかなと、私は思いました。そしたら、何かで休み時間にしゃべっていたときに、クラスの子が私に「ほんまはあんなやつちがうねん」と言うのです。それで、僕は「そやな、ほんまはあんなやつちやうわな」と言いたかったけれど、言えませんでした。どこかで、どこまでこの子を信じられるだろうと思っていたのです。なかなかしんどかったです。

このしんどいときに、私が一番励まされたものがあるのです。私は、「ぼちぼちいこか」というホームページをやっています。そこに自分の趣味のことや学校でのことやを書いていきます。「かばのしっぽ」日記という、日記です。何を書いていたか読みますね。この子らと、お風呂に一緒に行ったのです。銭湯に。自分の校区にある銭湯へ。

子どもと銭湯

クラスの子どもたちと一緒に銭湯に行った。私が浴室へ入っていったら既に7人の子らが水風呂中心に遊んでいた。「先生、H君な、鼻血2回も出さはった！」という報告から始まった。聞いたら約束の5時よりも20分も前から入っているのだそう。そう言えば、場所の分からない子は学校集合だったのだが、4時半から私を誘いに職員室へ来ていた。

私がサウナに入ってしまったら、鼻血の世話をしてくださった方が、詳細を話してくださった。「ありがとうございます」とお礼を申し上げた。その方は、一緒にサウナに入っていたやせ気味の子に、「わしもこの子と同じで鉛筆みたいに痩せてた。お前、あんまりご飯食べへんやろ」等と話しておられた。この方は子どもと一緒に風呂に入るのを嫌がっておられない方だと分かる。

電気風呂で、「うわー、ビリビリや」と歓声を上げる、水風呂やサウナで名前を言い合いながら我慢比べをする、ジェットで2人入って「入らんといて」などと騒ぐ、水風呂へ入ろうかどうしようか躊躇している子を後ろから押して、「〇〇君、やめて」・・・それはそれは騒がしい。そして私たちが行った銭湯には水風呂に「氷」が入り込むようになっていて、これに子どもはくぎ付けになる。銭湯は子どもが騒げる要素満載の場所なのだ。子どもたちは、お風呂に入りながらその子どもらしさを十分発揮する。

掛かり湯はしなくてはいけない、タオルは浴槽につけない、銭湯内で走ってはいけない、騒いで他のお客さんの迷惑にならないようになどの一応の注意はして連れてい

くのだが、何が迷惑なのかは応用問題で、例えば水風呂に潜って上がってきて思い切り頭を振っている子は、その水しぶきが他のお客さんにかかっていることに気が付かない。この子は、水をかけられたおじさんに「誰や、わしに水をかけたヤツは」と言っただけで水をかけられていた。

私と子どもたちが水風呂のところにいたら、「M 小学校の子どもは、静かにお風呂に入る」とわざわざ言いに来てくださった方もおられた。「そのとおりです」としか言いようがなかったが、この方も好意的に子どもたちを見てくださっているのが分かった。そして、子どもの行き過ぎをいさめる力がこの銭湯にはあった。多分、教師が連れてきているということが分かっているということもあってのことだと思う。

その銭湯に刺青を入れた方が入ってこられた。「先生、刺青や！」（ヤメテチョウダイ、オネガイヤカラ）という気持ちになった。まあ、正直と言えば正直である。しかし、小学校4年生ぐらいになれば、こういう発言が「ヤバい」ことぐらい直感的に分かっていると思う。それをあえて言うのだから、心配になる。「先生、あの何したはんの？」ではないのである。「君なあ、人に指さされて、『何とかや！』と言われた人、いい気持ちするか？ よう考え」と言ったのだが。

銭湯を上がれば、飲み物が待っている。定番のコーヒー牛乳が待っていて、私が上がっていったら、宴たけなわであった。「先生、もう1本飲んでもいいか？」と聞く子がいた。「それは自分のおなかと相談し」と言った。「夕ご飯前やからやめとき」と言うべきだったなと後から思った。「やめといた方がいいで」と他の子が言っていた。

入湯料150円、飲み物代120円ぐらい。300円弱で子どもたちは堪能して銭湯から帰った。

翌日の日記に何人もの子が銭湯のことを書いていた。

今、私のHPに掲示板はありませんが、この当時、感想の書き込みが楽しみでした。氷の水風呂について、ハヤブサという人が「日記を拝見して大笑いさせていただきました。あそこのお風呂屋は子どもたちが喜びそうですものね。そして、水をかけたおじさんがいい味しています。そういう注意の仕方もあるのかと（笑）」。

かまきりりゅうじさんは「子どもと銭湯に喝采を」と書いてくれています。「かばのしっぽさん（僕はかばのしっぽというハンドルネームなのです）、子どもと銭湯に拍手喝采です。実は用があって、今、小砂丘忠義の『生活綴方の伝統』の中の『たくましき原始子ども』の項を書き写しているところなのです。それが、『子どもと銭湯』を読んでうれしくなって、それをやめてこの書き写しをしています。いつの頃からか言っている『子どもの内面に寄り添う』というのは、何をいまさらちょろいことをと苦々しく思っていました。『子どもと銭湯』がそれを吹き飛ばしてくれています。かばのしっぽさん、うれしい限りです。子どもたちもうれしいことでしょう。拍手」。

このかまきりりゅうじさんというのは大阪綴方の会の野名龍二さんで、野名さんがこれを読んでくださったのです。小砂丘忠義の著書を挙げて、子どものことを認めてくれる。何かすごくうれしかったのです。何か子どもとの付き合い方、何もかもが失敗しているのではないかと心配していたので、励まして頂いてありがたかったです。

おわりに 専門学校生も書きたがっている

ちょうど時間になったところで終わりたいと思うのですが、退職後、専門学校の学生さんに教える機会を与えていただきました。私の想像以上に皆さん真面目に授業を受けてくださり、面白がってくださいました。また機会があったらまた読んでいただけたらうれしいのですが、国語というのを初めて面白いと思ったというのですね。僕のやったことを楽しんでくれました。講義の感想を寄せてくれました。

ここからは、思うままに書かしてもらおう。

この国語の授業を受けた感想を書きたい。

恥ずかしいことだが、最初あたりの授業で、私はよく泣いていた。泣きながら必死でバレないように抑えた。詩や作品の豊かな心に触れたこともあるが、みなコメントに心動かされたことが大きかった。

他の人に、作品の何がわかるかとかをくくっていた。それが、みんなのコメントを読んで負けたと思った。しっかりと作品や表現を受け止めていた。つまり上から目線で見えていたのだ。

何よりも驚いたのは、みんながこれほど「思っていた」ことだった。私には見えていなかった。みんなも表に出すことはしていなかったと思う。

私は何を作っていたかということ、講義資料を作っていたのと、「国語通信」というのに前の時間に感想を書いたものを載せていたのです。そしたら「この川柳が面白かった」「あれで笑った」「吉野弘さんのあの詩はとでもよかった」。そんなことが書いてあるのですが、そういうのを授業の初めにみんな読んでいたわけです。その中で今読んだような感想を持ってきていた。生活綴方のやり方というのはこの人たちにも通じるのだなということがとてもうれしかったのです。

それで、最後に何で成績をつけたかということ、エッセイを書いてもらってつけました。そのエッセイは、私にしか書けないということを見つけて、そのことをしっかり書く。書き方については、こんな書き方がありますとあって、日本作文の会の系統的な指導を取り入れました。表現過程として、表現意欲喚起・取材・構想・記述・推敲・鑑賞という段階があること。文の書き方として、～しました、～しましたと書く展開的過去形表現、～です～ですと書く説明的概括的表現、現在形進行形表現があることを教えました。それで構成表を作らせ、文を構成して書くということを教えました。これはある程度大人になっていけば、理解できてやれるのです。これを教えることに意味があるなということを感じました。何でもかんでもそうしなければいけないということではありません。

その中で、自分にしか書けないことというのが一番大切なことです。書いてくれたものを三つほど載せてあるのですが、三つかな、四つかな。LGBT に関することを書いてこられたのが 26 ページのものです。2 番が「人間のゆえん」。それから 25 ページは電車の中でとても良い出会いがあったということ。27 ページに出てくるのは家庭崩壊で自分の夢がずたずたになって、お母さんを信じられなくなった。お姉ちゃんの手助けでやっとこの学校に来て、今、私は何とか頑張ろうとしているということが書いてあります。27 ペ

ページの「私の消えない痕」というのは、自傷行為がやめられない人です。27 ページの下の真ん中の辺に、「(最後に) 先生にとっては気味の悪いものかもしれません。本当にすみません」と。別に謝ることは何もないのですけれども、こんなことを書いてくれました。よく書いてくれたなと思って、これはありがたいですね。でも、私がこれを受けとめられる人にならないといけない。この作品を読み合う時間がない。生活綴方は、やはり読み合う時間があると、みんなで考えられたら、励まし合いができるのですが。この自傷行為だけは放っておくわけにいけないので、このときの校長先生が川地先生のお知り合いで、私もちょっとしゃべらせてもらったことがあったので、その先生に相談しました。この人の相談にちょっと乗ってあげてほしいというお話をしました。そしたら担当の教官がすぐに話を聞きますと言ってくれました。その後どうなったか私には分かりません。作品処理とよく言うのですけれども、どんな処理の仕方か。そこが綴方教師の真骨頂がためされるころだと思えるのです。文集にして読むだけではなくて、そういった人をどのように励ましながらか、どういう手立てがあるのかということを考えていくということが一番大事な教師の役割だと思っています。

長々と話をさせていただきまして、本当にありがとうございます。

質疑応答 概要

①書かない、書けない子どもへの指導について、②京都の到達度評価と生活綴方について、③小宮山氏が受けてきた教員養成とその後の実践について質問が出された。

(川地) 小宮山先生、ありがとうございます。もうあつという間の3時間で、追加の質問も受けられたらと思っていたのですが、いったんここで閉めさせていただきたいと思えます。最後に、渡部昭男教授から、一言閉会のごあいさつを頂きたいと思えます。よろしくお願いいたします。

閉会挨拶

(渡部) 小宮山先生、ご報告ありがとうございます。まだまだお伺いしたいなということで、本当に3時間があつという間に過ぎてしまいました。企画いただいた川地先生、それから共催いただいた京都大学 E.FORUM の皆さん、本当にありがとうございます。

ご参加いただいた皆さんに、少しこの近畿地区の研究活動についてご紹介したいと思います。日本教育学会近畿地区では、「三都物語」と称しまして、京都・大阪・神戸が主担当になって、毎年三つ以上の企画を提供しています。今回の企画は、学会の経費で運営されているということもあって、この後、報告をまとめまして、神戸大学のリポジトリ「Kernel」というものがありますが、こちらにアップされます。私どもが死んでしまった後も、リポジトリが続く限り、世界中、時空を超えて、場所を超えて発信されるものです。

今日お聞きして私は、今日の参加者の中に韓国の方が複数名おられます。韓国ではこのような実践はどのようになっていたのだろうかということで、例えば今回のまとめを韓国語に訳してみても同時にアップしても面白いのではないかと。または来年以降の企画の中にお隣の国・韓国でこういった綴方のような実践があると、交流してみると面白いのではないかと。というふうに思った次第です。

また、2006年から「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」といった企画をシリーズで組んでおります。昨今のこのような時代状況にあって、今の時代が新たな戦前にならないようにという思いを強くした今日の企画でした。どうもありがとうございました。以上です。

(川地) 渡部先生、どうもありがとうございました。

皆さん、最後にもう一度、小宮山先生に大きな拍手をお送りして、この会を閉めたいと思います。ありがとうございました(拍手)。では、これにて閉会とさせていただきます。ご参加どうもありがとうございました。



共催：日本教育学会近畿地区（担当理事 川地亜弥子・渡部昭男）

京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センターE.FORUM

研究集会のご案内

日本教育学会近畿地区では、2006 年以来、「戦後教育実践に学ぶ」「私の教師生活」等の研究会を開催し、戦後教育実践について実践者の報告に基づき議論を深めて参りました。このたび、E.FORUM との共催で、下記の通り研究集会を開催します。対面・オンラインを併用します。ふるってご参加ください。

日 程：2023 年 4 月 23 日（日）14:00-16:50（予定）

講演者：小宮山 繁 氏

元京都市小学校教諭。日本作文の会元副委員長、近畿作文の会元会長、京都綴方の会元会長、京都市つづり方の会元事務局長等歴任。単著に『ことば遊びアラカルト』小学館、2008 年。

会 場：①対面会場 京都大学教育学部第1講義室

（京都大学吉田キャンパス総合研究2号館1階北側）【[地図](#)】

②オンライン会場 Zoom ミーティングルーム

ルーム情報はお申込み時にお知らせします。

お申込み：下記の URL または、QR コードよりお申込みください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSc2sBIRpLdr+NKzWQg8R-5SQP02F0iXugFI-dcvn4A0s-aZvQ/viewform?usp=sf_link



※2023 年 4 月 20 日までに
参加申込をお願いします（先着 90 名まで）。

※対面会場は当日参加も可能ですが、
資料準備の都合上、お申込み頂けると大変助かります。



問い合わせ先：

神戸大学 川地亜弥子

[lecture.kawaji\(a\)lion.kobe-u.ac.jp](mailto:lecture.kawaji(a)lion.kobe-u.ac.jp)

※ (a) を @（半角アットマーク）に置き換えて送信して下さい。

私
の
教
師
生
活
—
—
講
演
者
—
—
小
宮
山
繁
氏
—
—
京
都
の
綴
方
教
師
と
し
て
—
—

私の教師生活 7

印刷 2024年7月20日

発行 2024年7月28日

編者 日本教育学会 2023年度近畿地区研究集会 神戸企画担当
川地亜弥子・渡部昭男

印刷所 神戸大学生生活協同組合

(非売品)